

江戸ノスタルジア 吉例浮世絵大公開！

明治時代に描かれたなつかしの「江戸」

町田市立国際版画美術館 2017.03.11～04.09

「江戸」は、明治の幕開けにより新しい西洋文化が入り込んで徐々にその姿を「東京」に変えて、人々は文明開化の波を新鮮に感じる一方、1889（明治22）年には「江戸開府三百年祭」が開催されて「江戸」への郷愁も高まっていた。

つきおか よしとし
「月岡 芳年」（1839～1900）《風俗三十二相うるささう寛政年間処女之風俗》
（1888（明治21）年）



寛政時代の十代前半らしい女の子がモデルで、燈籠髪（とうろうびん）や島田髷（しまだまげ）というヘアスタイルに、びらびらした簪（かんざし）や赤い布を付けた若者らしいファッションで、“キャーキャー”とはしゃぎながら猫に頬ずりしている姿を描写した作品である。

自分とお揃いの鹿子布（かのこぬの）を猫の首輪にしているところから見ると、この猫は女の子のお気に入り「白い猫」で、題名の「うるささう」は、どこか迷惑そうな表情をしている猫の気持ちであるかもしれない。

（上部の3人娘姿は下部写真の部分である。）

ようしゅう ちかのぶ
楊州 周延（1838～1912）《千代田の大奥花見》（1894（明治24）年）



画伯の代表作で、江戸時代の「大奥」（将軍の居住地で職務を遂行する場所）を創造で描かれている作品である。明治の人々にとっては「大奥」は非常に関心の深いテーマであり、当時は絶大な人気を博していたとされている。

この頃の「浮世絵」は、江戸を題材とした例が多く見られ、かつては描くことのなかった「大奥」や「江戸城」の様子が数多く描かれている。

参考書籍：月岡 芳年 《謎解き浮世絵業書・風俗三十二相》（日野原 健治解説）